

承前

「映像を」

アシュトン・ベイリーが合図をすると、会議室の末席に等身大のホログラムが現れた。

椅子いすに座って落ち着かない様子で身じろぎしているのは、林はやし公安部長だった。日本にも、この会議室の映像が送られているはずだが、我々の姿は、この男の目にはどう映っているのだろうか、バーリンは思った。人類史上最もパワフルなグループ——世界会議の面々は。表向きは、オプザバーとしての参加だが、実態は被告人である林にとつては、さしずめ自分と自分の国の運命を決める裁判官と陪審員だろう。

「林さん。ようこそ、世界会議へ」

アシュトンが、議長席から声をかける。

「ホログラムとはいえ、こうしてお目にかかれるのは、限らない喜びです」

「こちらこそ。世界会議にご招待いただき、たいへん光栄に思います」

林公安部長は、流暢りゅうちやうとは言えないものの、正確な英語で答えた。

この男が日本の実権を握っているのかと、バーリンは思う。それほど畏縮していないところを見ると、我々と同じサイコパスだろうが、怖さを感じさせないという点で、本物の悪魔とは程遠とほい。

会議の他のメンバーたちも、おそらく、一瞬にして値踏みをすませていることだろう。後は、

少々いたぶってから、死刑宣告をするだけだ。

「……インターネット回線は、すべて絶たれたと思っていました」

林公安部長は、沈黙を恐れるように話し出す。

「もしかして、宇宙ゴミ反射通信ネットワークが、本格運用を始めたのでしょうか？」

アシユトンは、首を横に振った。

「いいえ。まだ技術的な問題が多くて、EDENは使える状態ではありません。これは、最近始めたばかりの、新しい通信システムによるものです」

アシユトンが生命科学者のラシッド・アリの方を見ると、ラシッドが説明する。

「海底ケーブルも人工衛星も、破壊的な意思から守り抜くことは困難です。したがって、唯一機能するのは、我々の最も身近にある資源を利用する通信システムでした」

「身近にある……？」

林公安部長には、ピンときていないようだった。

「超能力を持った人間ですよ」

ラシッドは、微笑む。

「電波をねじ曲げて、地球の裏側まで届けるのです。厳しい訓練の結果、ようやくそれが可能になりました」

「しかし、超能力者に依存した通信というのは……」

林公安部長は、信じられないという顔だった。

「彼らが、なぜ命令に従うのか、いつまで言うことを聞くのか、ということですね？」

ラシッドは、得意満面だった。

「それでは、世界会議の保有する、最新の通信機をお目にかけてみましょう」

会議室に、少年の乗った車椅子を押して、白い看護師の制服を着た男が入ってきた。

「この子は、トビーです。人類に奉仕するよう、徹底的な教育を行いました。その結果、こうして通信機として活動することに、無上の喜びを覚えています」

トビーは、八歳の黒人少年だった。高いIQを示すように額が広く、整った顔立ちをしていた。だが、今は半は白目を剥き、かすかに震えながら電波の転送に集中している。

「教育の本質とは、今も昔も洗脳です。ですが、もちろん、それだけでは完全ではありません。

万一のための安全装置が必要です。すなわち、対人攻撃を行いそうになったときに作動する自己破壊プログラムです。我々は、それをDNAに組み込む技術を開発中ですが、今は機械で代用しています」

ラシッドは、車椅子に取り付けられた機械を指差した。

「複数のAIが、常にトビーの脈拍や脳内物質の濃度をモニターし、思考内容を監視しています。危険と判断された瞬間、彼の血中には即効性の毒物が注入されます。彼がそれを排除しようと念動力を作動させたときも同じです」

「……その技術が確立されているなら、すべての超能力者を管理下に置くことも可能なのではないですか？」

林公安部長の質問に、ラシッドは、難しい顔になってかぶりを振った。

「残念ながら、これが機能するのは、最初から管理下にある子供たちに対してのみです。既に能

力を発現させている子供の場合、レーティングで1800を超えると、システムをすべて同時に無効にされてしまいます」

それが、残念ながら現在の技術的な限界だった。愧ソーンヤルテボトシス死 機構をDNAに組み込むまでは、人類に安息の日は訪れない。

「……そろそろ、本題に入ろう。我々にとって、時間は何よりも貴重だ」

『Human League』の事実上の支配者であるジョエル・バカラックが、苛いらだ立たしげに発言すると、場の空気が一変した。

「そうですね。それでは、ジェームズ」

アシュトンに指名されて、ジェームズ・ワツサーマンが、軽く咳せきばら払いをした。アメリカ合衆国大統領フレディ・ノースの側近だが、実際には大統領を自由に操れる存在だ。

「林さん。前回の電話会談では、お互いに、合意に達したものと思っていたのですが？ すなわち、『ドミニノ計画』の実行についてですが」

「もちろんです！」

林公安部長は、間髪を入れずに答える。

「実際、すでに計画に着手しています。ターゲットは、新宿の魔しんじゆく デイモンプリンス王子として知られる、フリッツ・テツカです。作戦は成功し、テツカは、ほどなく他の魔王子と戦端を開くはずですよ」

「しかし、その際、予期せぬことが起こったのではないですか？」

ワツサーマンが訊ねると、林公安部長は驚きの表情を見せた。どうして、そこまで知っているのかと思っているのだろう。

「囮おとりに使った微弱な超能力者が、ラーマン・クロギウス症候群を発症したらしいのです。相当な人的被害がありました。その男は、急に姿を消してしまいました」

「それは、奇妙ですね。鶏フオックス・イン・ザ・ヘンハウス小屋の狐症候群という別名の通り、死ぬまで殺し続けるのが、彼らの常だと思っていました」

「それに関しては、現在、調査中です」

林公安部長は、苦しい表情になった。

「それで？ やつらの戦争は、いつ始まるのかね？」

バカラックが、追及する。

「近々です。すでに秒読み状態だと、お考えください」

林公安部長は、無理やり作ったような笑みを浮かべた。

「我々には時間がない」

バカラックは、表情を消して言う。

「もし、一週間たっても戦争が起らないようなら、消毒クレンジングを実施せざるを得ない」

「それは……どうか、もう少しだけ待ってください」

林公安部長は、懇願てんげんの態ていだった。

「もし一足飛びに核戦争が起れば、一般人対超能力者という図式が明白めいびつになってしまいます。

それは、人類にとって望ましいことではないのでは？」

「……たしかに、超能力者同士が戦いを起こすことが、計画には肝要かんようです」

アシュトンが、助け船を出すように言った。

「ありがとうございます。こちらでも、一刻も早く戦いが始まるよう、手を打ちますので」

「ですが、もう、そんなことを言っていられなくなりました」

アシュトンは、にこやかな表情を崩さずに、言い放った。

「とんでもないことをしてくれましたね、林さん」

林公安部長が凍りつくのを、他のメンバーと同じく、にやにやしながらバーリンは見ていた。

「待つてください……それは、いったい？」

「今さら、とぼけないでください。あなた方は、橋本・アツペルバウム症候群の少女を生かしていた。それが、地球規模の災厄を引き起こしかねないことを知りながらです」

「いや。それは」

ホログラムでも、林公安部長が額に脂汗あぶらあせを滲にじませている様子がわかった。

「それだけでも由々ゆゆしき事態だと思っていましたでしたが、あなた方のさらなる失態によって、いよいよ危険は現実のものとなりました」

アシュトンのチャージングな唇から出てくるのは、ドラゴンの炎のような言葉だった。

「こともあろうに、世界を破滅に追い込みかねない少女を易々やすやすと逃がしてしまったのは、どういうことですか？」

林公安部長は、しらを切るのは無理だと悟さとつたらしかった。

「それについては、率直にお詫わびいたします。現在、動員できる警察官すべてで、行方を追っているところです。……もちろん、発見し次第、射殺する許可を出しています」

「わかっていますね。わたしたちは、悠長ゆうちやうにあなた方の搜索を待っているわけにはいかないの

ですよ」

アシュトンは、溜め息をつきながら首を振った。

「一秒でも早く、危険は除去しなくてはなりません。ですが、少女の所在がまったく不明である以上、外科手術的攻撃も無理です。……だとすれば」

アシュトンは、意味ありげに言葉を切る。林公安部長は、言葉も出ない様子だった。

「消毒を前倒しにするしかないだろうな」

バカラックが、気の毒そうに、アシュトンの言葉を補った。

「それだけは……どうか、思いとどまってください」

林公安部長のホログラムは、立ち上がった。

「その少女の存在は、我々一般人だけでなく、超能力者たちにとっても深刻な脅威です」

バーリンは、ついに沈黙を破った。

「核攻撃が望ましくないのであれば、アナトーリ・グリシンによって、広範囲を無差別に破壊するという選択肢も考慮せざるを得ないでしょう」

林公安部長は、今にも床にひれ伏すかと思えたが、そんなことをしても効果がないと、気がついたのだろう。傲然と胸を張って、反撃に出る。

「それが世界会議の結論だとすれば、残念ですが、我々も甘んじて死を受け容れることはできません」

「それは、どういう意味ですか？」

口調は柔らかいままだが、アシュトンの目がさらに厳しさを増す。

「魔王子たちと連携して、あなた方と戦うよりないでしょう」

「勝てると思うのですか？」

アシュトンは、嘲笑うように言った。

「いいえ。もちろん、勝てないでしょう。しかし、いよいよ追い詰められれば、選択肢は神風攻撃しかない。それが、我が民族に連綿と受け継がれたDNAです」

微妙な空気が漂った。ハツタリだと思ふ反面、日本人ならやりかねない気もする。

「それに、今、フェリックス・バーリンさんがおっしゃいましたが……」

バーリンは、驚愕した。どうして、知っているのだろうか。諜報活動エスピオナージュとは無縁の国民だと侮っていたのだが。

「グリシンという少年は、たしかに世界最強の超能力者でしょう。しかし、彼が本当に、あなた方の言いなりになるでしょうか？」

「橋本・アッペルバウム症候群の少女という共通の敵がいれば、間違いなく、攻撃に同意すると思います」

バーリンは、静かに答える。

「超能力者たち共通の敵は、むしろ世界会議ではないですか？」

バーリンは、林公安部長を見直していた。なるほど、なかなか厄介やっかいなサイコパスだ。

「通信手段もなく、どうやって、グリシンにそれを伝えるつもりですか？」

「魔王子たちなら、雲にキリル文字を書くことくらい、できると思いますよ」

怒りを含んだ沈黙が訪れた。簡単に仕留められると思った鼠に、思わぬ反撃を喰らった恰好かつたうだ

った。

「……わかりました。そのくらいにしておきましょう。それ以上言ったら、宣戦布告しかなくなります」

ぎりぎりのところで、アシュトンが場を収める。

「林さん。あなたに与えられる猶予は、一週間です。その間に、少女を見つけて処分し、超能力者同士の戦いの火蓋を切らせてください。それができない場合には、我々も行動に移ります。神風攻撃でも何でも好きにしてください」

林公安部長は、立ったまま深々と頭を下げた。

「ご配慮、感謝いたします。一週間以内に、必ず吉報をお届けしますので」

林公安部長のホログラムが消えた後、不穏な声が湧き起こった。

「甘すぎる！ どうして、今さら、チャンスをやらなげやならんのだ？」

「あの男は、面と向かって世界会議を脅した。それだけでも死に値する行為だ！」

「たったの一週間で、何ができる？ あの国の警察力など、ほとんど死に体だろう？」

「どうせ失敗するんだ！ 一週間も与えるのは長すぎる」

アシュトンが、まあまあと言うように両手を拡げる。

「わたしは一週間と言いましたが、実際に猶予するのは、五日間だけです」

なるほどと、バーリンは思った。

「少女を見つけるのも、戦争を起こすのも、いよいよ間に合わないとなったら、あの男は、さっき言ったとおりの反撃を策すでしょう。それを許すわけにはいきません」

つまり、五日後——六日目の朝には、日本列島に、雨霰あつちのれと核ミサイルが降り注ぐことになるのだ。

バーリンは、林公安部長を見直していたので、ほんの少し残念に思った。実際の猶予がもつと短いことに気がつけばいいのだが。

吉村真二郎よしむらしんじろうは、身を起こした。

サビーナのアパートに転がり込んでから三日になるが、とにかくやることがないので、退屈なまできなかった。

冷静になってみると、手塚不律てづかふりつを敵に回してしまったという恐怖から、一步も外に出る気になれなかった。かといって、部屋に閉じこもっていても、ゲームも、テレビすらないので、時間を潰つぶすことができない。

しかたがないので、超能力を発現する練習に励んだ。とはいっても、部屋の中だから、たいしたことはできない。せいぜい、パイプ椅子やフライパン、皿などを宙に浮かせて、自在に操れるよう練習するくらいである。

本当に、俺が、あの手塚不律に勝てるのだろうか。

サビーナに言われたときは、その気になったが、後から考えると、どう考えても無理としか思えなかった。不律の幻影を宙に思い浮かべて、それに向かってナイフやフォークを突っ込ませてみる。だが、どんなに早くやっても、あたりまえだが、殺せる気がしない。これで何とかなら、銃弾で暗殺できるはずなので、誰も苦勞はしないだろう。

とはいっても、他にどうしようがあるのだろうか。目眩ましの類いは、超能力者同士の戦いで常套手段じょうとうしゅんであり、よほど斬新ざんしんなトリックでないとは通用しないだろうし。

サビーナは、ずっと外出していた。知り合いにコンタクトを取って、不律を殺す機会を窺うかがっているようだが、それもうまく行くとは思えなかった。

ここから逃げようかと、何度も思った。今ならまだ逃げ切れるかもしれない。とにかく、東京から離れさえすれば、不律の目は届かないはずだ。

とはいえ、行く当てはどこにもなかった。東北も九州も、魔王子並みにヤバイやつらが仕切っているという噂うわさだし、知り合いも親戚せきもないのだから。

それに、吉村には、ここから逃げ出さない理由が、もう一つあった。

サビーナ……。

豊かな黒髪、きりりとした眉まゆと中央アジア系の中高な顔立ち。そして、強い意志を示す茶色の瞳。

それだけでも、恋に落ちるには充分だったかもしれないが、何よりも吉村の心を捕えて放さなかったのは、サビーナの持つ能力だった。

どんなに苛立いらだっているときでも、あの目を見つめるだけで、心を浄化し、穏やかにしてくれるのだ。それは、もはや、麻薬のような抗かしがたい魅力だった。

手塚不律を殺し、ノナとイスミロフ博士を救ったら、おそらく、サビーナは一生せいせ傍そばにいてくれるに違ちがいない。それこそが、吉村の人生の目標であり、究極の幸せのイメージになっていた。

甘い空想くうそうに浸ひっているとき、突然、固定電話が鳴った。

吉村は、しばらくの間、茫然ぼうぜんとして電話を見つめていた。ここへ来てから、電話が鳴ったことなど一度もなかったし、サビーナからも何の指示も受けていなかった。そもそも、まだ固定電話が通じるのかどうかも確信がなかったくらいである。

電話は執拗しつように鳴り続けた。ケータイと違って、留守番電話に切り替わるか、掛けた側が断念しないかぎり、いつまでも鳴るものらしい。

どうしよう。吉村は迷っていたが、ふと、サビーナが掛けてきたのではという可能性に思い当たった。俺に何か、至急伝えたいことがあるのではないか。もしかしたら、すぐに来てくれとか、すぐにそこから逃げろとかいうことかもしれない。

考えたあげく、受話器に手を伸ばした。もしも相手がサビーナではなかったとしても、こちらが声を出さなければ実害はないはずだ。

吉村は、受話器を耳に当てた。

すると、早口で囁ささやくような声が聞こえてきた。女性の声だが、日本語ではない。喉頭音こうとうおんが混じっており、英語でも中国語でもないことがわかった。サビーナの声に似ていた。

もしかして、ノナなのか？

「ノナ？」

思わず、声に出していた。相手は、はっとしたように沈黙する。

「ノナ？ 俺、吉村真二郎。今、サビーナのアパートにいるんだ」

気がついたときには、大事な秘密をペラペラと喋しゃべってしまっていた。

「シンジロー？ ヨシムラさん？」

ノナは、可愛らしい声で言う。

「そうだよ、俺！ サビーナは今留守だけど、伝言するよ」

「ああ……：テシェツキユル、エデリム。ありがとう。とてもとても、大切なことです。一度しか言いません。よく聞いてください」

ノナは、早口になる。

「フリッツは、明日の朝、東京駅に行きます。フリッツのために、臨時列車を動かします」

「フリッツ？ 手塚不律か！」

吉村は、興奮した。

「やつは、列車でどこへ行くんだ？」

だが、ノナは、吉村の質問は耳に入らないようだった。

「乗るのは、新幹線です。日本橋口から、目立たないよう一般の客に混ざって改札を通るのです。そのときが、たぶん、オンリーワン、チャンス……：オヌ、オールドン」

唐突に、電話は切れてしまった。

吉村は電話機を見たが、ナンバーディスプレイもない機種で、向こうの番号はわからず、こちらからかけ直すこともできなかった。

明日の朝、手塚不律は、東京駅へ行って新幹線に乗る……。

本当だろうか。いや、わざわざノナが電話をしてきて、嘘を言うとは思えない。彼女の言う通り、不律を殺す千載一遇せんざいいちぐうのチャンスなのだろう。

だが、下手をすれば……：下手をしなくても、返り討ちに遭う可能性は大だった。

吉村は、アパートの部屋の中をうろろと歩き回り、爪を噛み、ぶつぶつと独り言をつぶやいた。どうすればいい。行くべきなのか。行って、決着を付けるべきだろうか。

すると、玄関の鍵を解錠する音がした。

はっとして見ると、サビーナが買い物袋を持って帰ってきたところだった。

「遅くなって、ごめんなさい」

サビーナは、にっこりした。

「おなか、空いてませんか？」

「サビーナ。今、電話があった！」

吉村がそう言うと、サビーナは眉をひそめた。

「まさか、電話に出なかったでしょうね？」

「出た。向こうの声だけ確認しようと思って」

吉村の表情から、サビーナは何かを察知したようだった。

「誰から？」

「ノナだよ！」

サビーナは、当惑した表情になり、大きく首を横に振った。

「嘘です。そんな、ありえない」

「嘘じゃないって！ たしかに、ノナの声だった。ちょっと慌てるみたいだったけど、手塚不律が明日、東京駅へ行くって教えてくれた」

吉村は、覚えているかぎり詳しく電話の内容をサビーナに伝えた。サビーナは、じっと考え込

んでいた。

「……電話番号は、だいぶん前に、友だちに託しました。今この電話に掛けてきたということは、ようやく伝わったのか、それとも」

サビーナは、溜め息をついた。

「罨わなかもしれない」

「そんな、どうして？ だって、ノナだよ？」

「手塚不律に、脅されてたのかも」

「あいつが、そんなまどろっこしいことすると思うか？ 電話番号がわかったら、住所はすぐに突き止められるはずだ。だったら、ここを急襲して決着を付けるだろう」

サビーナは、まだ迷っている様子だった。

「そうとも限らないかも。手塚不律は、敵が多いから、簡単には出歩けない。おびき寄せた方がいいと思つたのかもしれない」

「疑つたら切りがないよ。ノナが、危険を冒して電話してきてくれたんだ。俺は、それを信じるべきだと思ふ」

吉村は、自分でも不思議だったが、力説していた。

「もし見送つたら、もう、こんなチャンスは二度とないかもしれない。俺は、あいつを、あいつを、絶対に殺す……！！」

吉村は、ぶるつと身を震わせた。これが、武者震いというやつなのか。

熱い怒りのマグマが、心の底から湧き上がってくるのを感じる。あいつを殺す。誰もが恐れて

いる新宿の魔王王子を、俺が、原形も残さず消滅させてやる……！！

部屋の中の物体が、ポルターガイスト現象のようにガタガタと振動を始めた。

「吉村さん。落ちついて。だいじょうぶ。吉村さん！」

サビーナが、吉村の目を覗き込んで、懸命に呼びかけていた。

気がつくと、殺意の発作は通り過ぎていた。部屋の中の物体は、元通り鎮ま_つまっている。

「だいじょうぶ？ 吉村さん」

サビーナは、両手で吉村の顔を挟_{はさ}んで、心配そうな目で見ていた。

「サビーナ……！！」

吉村は、サビーナを抱き寄せて、唇を合わせた。

サビーナは、抵抗もしなかったが、積極的にキスに応じるといこともなかった。ただ、されるがままになっている。

「サビーナ。愛してる」

「吉村さん」

サビーナは、哀しげに言う。

「もし、俺が、手塚不律を殺したら、ずっと俺と一緒にいてくれる？」

サビーナは、微笑み、そして静かにうなずいた。

(つづく)